

富山県氷見市  
鞍川金谷包含地、一の瀬包含地  
調査概報

昭和55年10月

氷見市教育委員会

# 鞍川金谷(くらかわかなや)の発掘

## 1. 鞍川金谷包含地の所在

富山県氷見市鞍川191番地ほか

県道氷見羽咋線と上庄川右岸とに挟まれた、鞍川部落北側の砂質台地の北端付近。(第1図参照)

## 2. 調査年月日

発掘準備 昭和55年5月28日(水)～6月13日(金)

水田に水止板を埋込み、水中ポンプをつかって発掘予定区域の排水と田干しを行った。

また、発掘地区の設定(グリッド27か所)を行った。(第2図A参照)

発掘調査 昭和55年6月14日(土)～16日(月)

## 3. 調査主体者

富山県氷見市丸の内1-1 氷見市教育委員会

## 4. 調査担当者

齊藤 道保 氷見市教育委員会教育長、日本考古学協会員

白岩 淳雄 富山県立氷見高等学校教諭、歴史クラブ顧問

小境 卓治 氷見市教育委員会社会教育課主事、学芸員

## 5. 調査協力者

坂田 美芳 氷見市教育委員会社会教育課長

東海 正幸 氷見市教育委員会社会教育係長

中勢 博 氷見市教育委員会社会教育課主事

浜田 義博 氷見高校歴史クラブOB、高崎経済大学生

湊 敏之 氷見高校歴史クラブOB、東洋大学生

富山県立氷見高校歴史クラブ員

## 6. 発掘調査面積

主要地方道氷見羽咋線の建設予定区域を中心として、東西300m×南北20m 約6,000m<sup>2</sup>。

## 7. 発掘地の立地及び現状

二級河川・上庄川右岸の標高2.0m～3.4mにあり、低部は水田、高部は台地で畑地となって

いる。

## 8. 調査の契機

当地域に、55年7月に主要地方道氷見羽咋線の新設工事が予定されていたので、事前に試掘調査をすることになった。

この地は昭和38年7月、氷見高校歴史クラブ員によって土器の散布が発見され、同月22日、鞍川410番地（当時は392番地と報告されている）の一画東西2m、南北5mが調査されたが、土器は極めて不規則に出土し、遺跡としての規模は不明と報告されている。

## 9. 発見された遺構及び出土土器

発掘トレンチ図中、Ⅱ-1・2、Ⅲ-1・2・3・4・5、Ⅳ-1・2・3・4・5はいずれも水田内で、土器出土はほとんどなかった。

同図中Ⅰ-1～9は畑地で、この中で遺物はⅠ-3～4が最も多く、Ⅰ-1～2、Ⅰ-5～9にも散在していた。

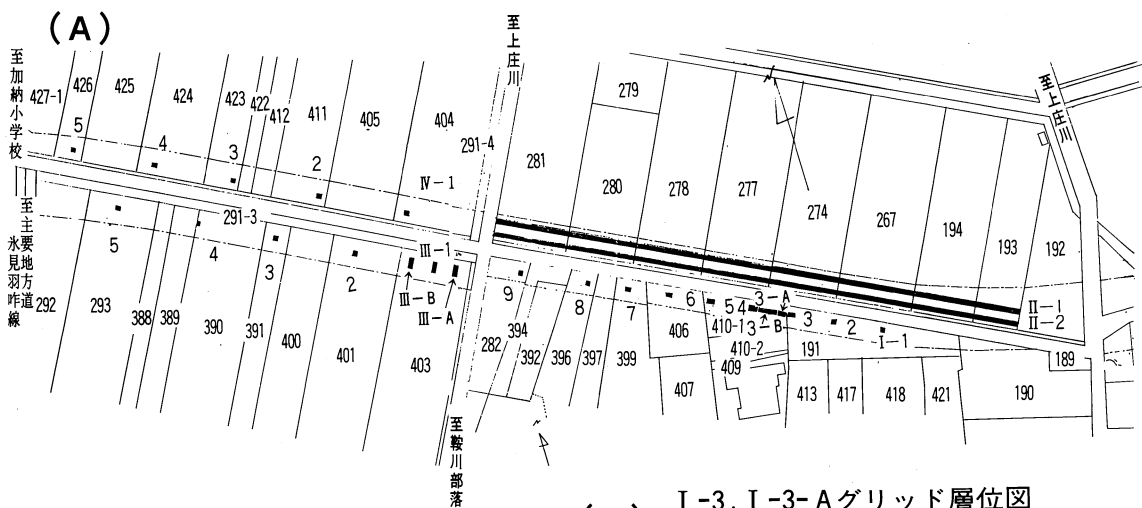
出土状況は極めて不規則で、かなり磨滅している小片が多かった。表土につづく、こげ茶色の泥まじり砂層（地表下30～60cm）中に含まれ、この層の下にある黄土色砂層には土器の含有はなかった。（第2図B参照）

なお、このⅠ-2～5あたりはかつて水田であり、明治年間に埋立てて畑地を造ったというのがこの埋立て用の土砂中に遺物が混在していたと考えざるを得なかった。話によるとこの土砂は、この近くから運搬されて来たらしいが、その場所は調査したが判明しなかった。

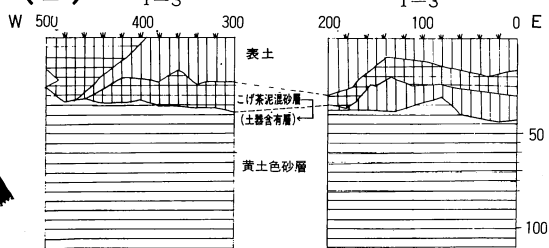
出土土器は、土師器片約150点、須恵器片約10点で、土師器は器の焼成、器形、口辺の模様などから、古式土師を含んだ土師器の古い時代のものと考えられ、須恵器は、器蓋の周辺部、ならびに土器底のつくりなどから7世紀後半頃かと考えられる。（第2図C参照 1～13は土師器 14.15は須恵器、なお第3図上段参照土器番号は第2図Cと同一になっている）



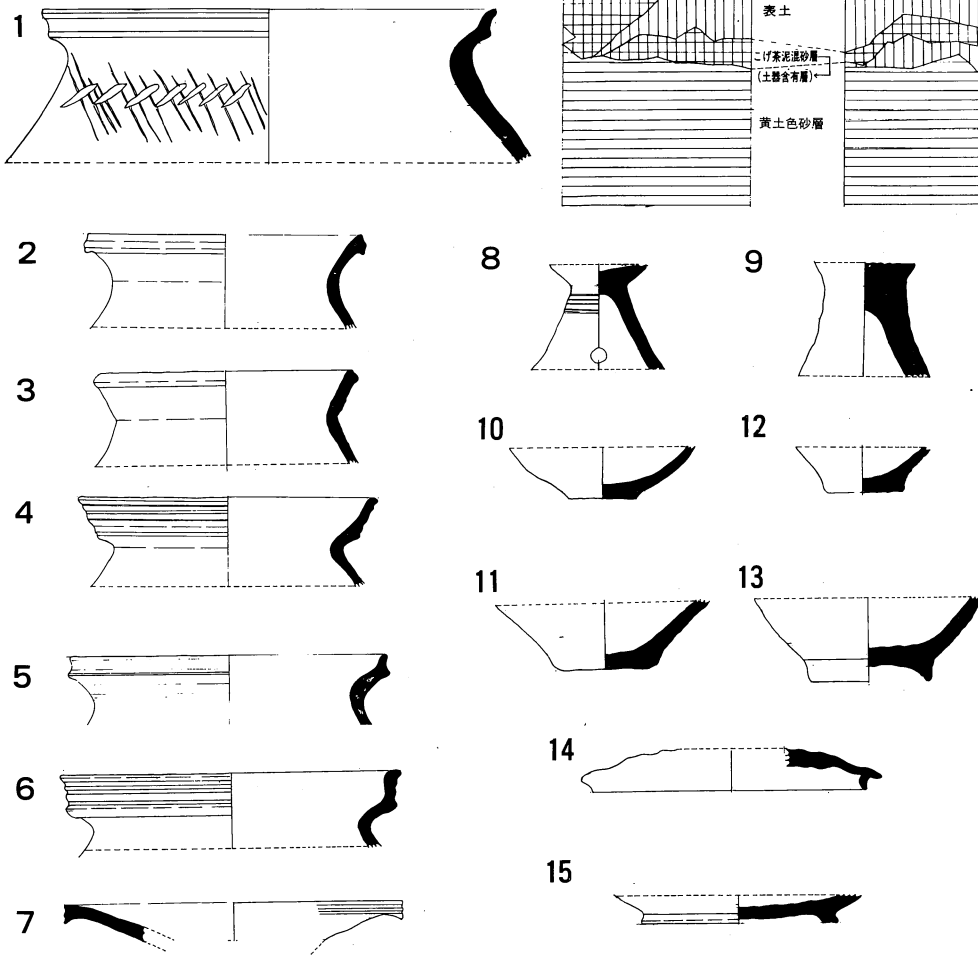
第1図 鞍川金谷包含地近辺図 (50,000分の1)



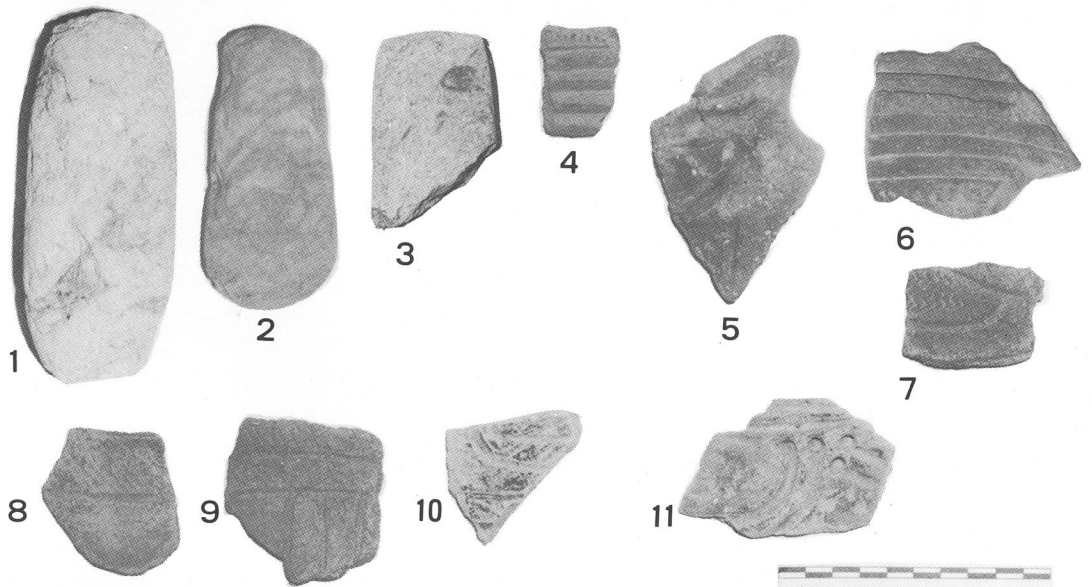
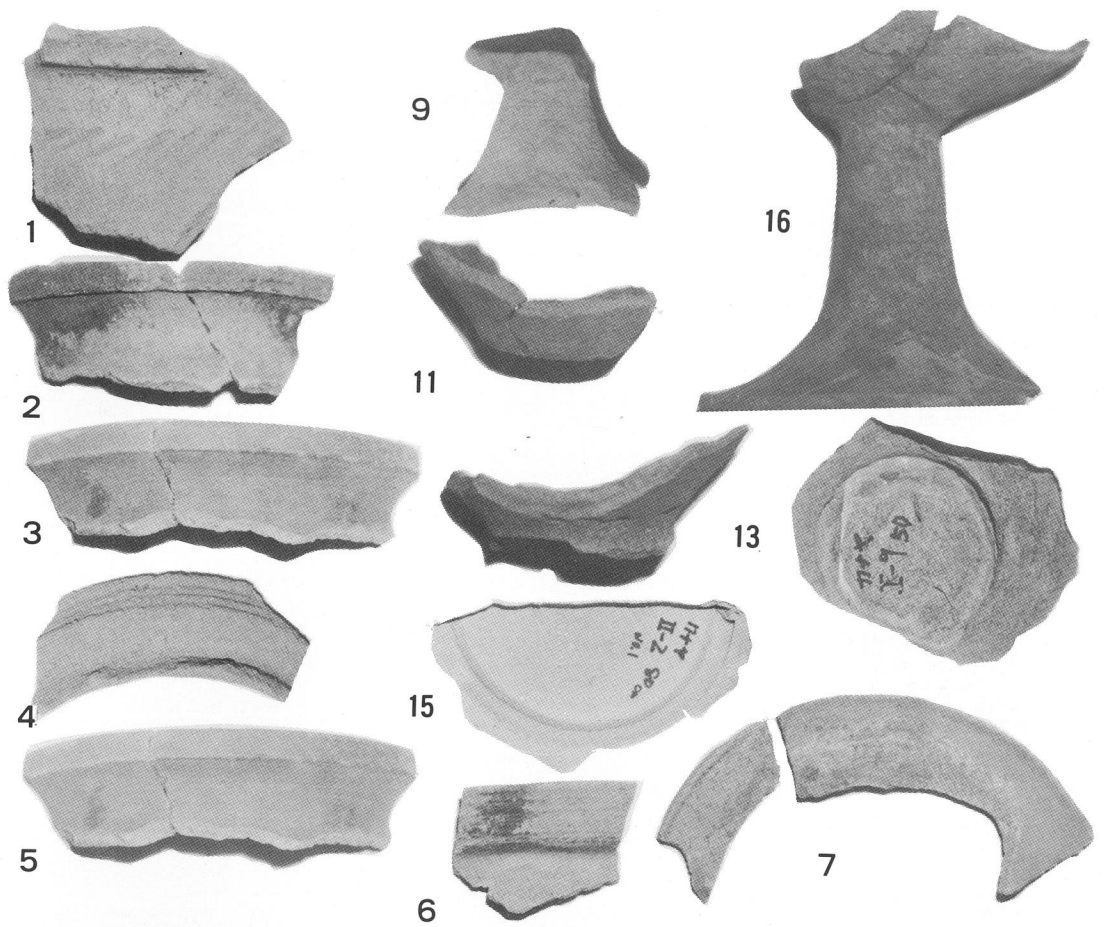
(B) I-3, I-3-Aグリッド層位図



(C)



第2図 鞍川金谷発掘トレンチ図(A)・地層図(B)・出土土器(C)



第3図 上段—鞍川金谷出土・下段—一の瀬出土  
 (番号は第2図と同一のものは同一の土器)

# 一の瀬(いちのせ)の発掘

## 1. 一の瀬包含地の所在

富山県氷見市上余川字番場3623番地ほか  
一般地方道鹿西氷見線と二級河川余川川にはさまれた、台地の南端部分で標高40m～50m。  
(第4図参照)

## 2. 調査年月日

昭和55年8月5日

## 3. 調査主体者

富山県氷見市丸の内1-1 氷見市教育委員会

## 4. 調査担当者

齊藤 道保 氷見市教育委員会教育長、日本考古学協会員  
小境 卓治 氷見市教育委員会社会教育課主事、学芸員

## 5. 調査協力者

坂田 美芳 氷見市教育委員会社会教育課長  
東海 正幸 氷見市教育委員会社会教育係長  
中勢 博 氷見市教育委員会社会教育課主事

## 6. 発掘調査面積

一般地方道鹿西氷見線にそってその南北各5m、東西50m、 $15\text{m} \times 50\text{m} = 750\text{m}^2$   
同地方道によって分断されたこの地方道に直交する南側末端部分、南北60m×東西3m = 180m<sup>2</sup>  
計約900m<sup>2</sup>。(第5図参照)

## 7. 発掘地の立地及び現状

碁石懸札に向う山地で、標高約40m～50mの台地と、その台地から1～2m下の水田。

## 8. 調査の契機

55年度中に、上余川番場地区一帯に道路拡幅工事、ならびに河川路つけかえ工事を伴うほ場整備が行われることになったので、これに先立つ事前試掘調査。

## 9. 発見された遺構及び出土土器

発掘トレンチ図（第5図参照）Ⅰ-1～4、Ⅱ-1～4はいずれも水田中で遺構、遺物ともに出土はなかった。

また、Ⅲ-1～3は道路北方の台地上で全く遺構も出土土器もなかった。しかし、道路の南方の台地からは東側面にそって土器の出土をみた。

昭和30年11月、氷見高校歴史クラブ員が、この台地近くの道路側溝で土器を発見し、同月20日道路南方の台地（第5図A-1参照）を調査し、台地南東側面から僅に包含層の存在を認めている。そして、この台地を切割って明治32年道路が拡張され、その折、土器が道路側溝にちらばったらしいということ調査報告している。

今回の発掘でわかったことは、この道路南方の台地は、最近に上部赤褐色土層が約100 cm削りとられ（第5図A参照）砂利まじりの土を約10cmひきならしてあることと、この台地東側面にそって旧地表下150 cm位のところに径30～60cmの石がならべて置かれていることである。

かつての懸札への道は第6図のように橋をわたったA地点から南へ下がり、迂回してB地点にて懸札へと上がっていったといい、A・B間の直線路はなかったのである（明治初年の地引図）。

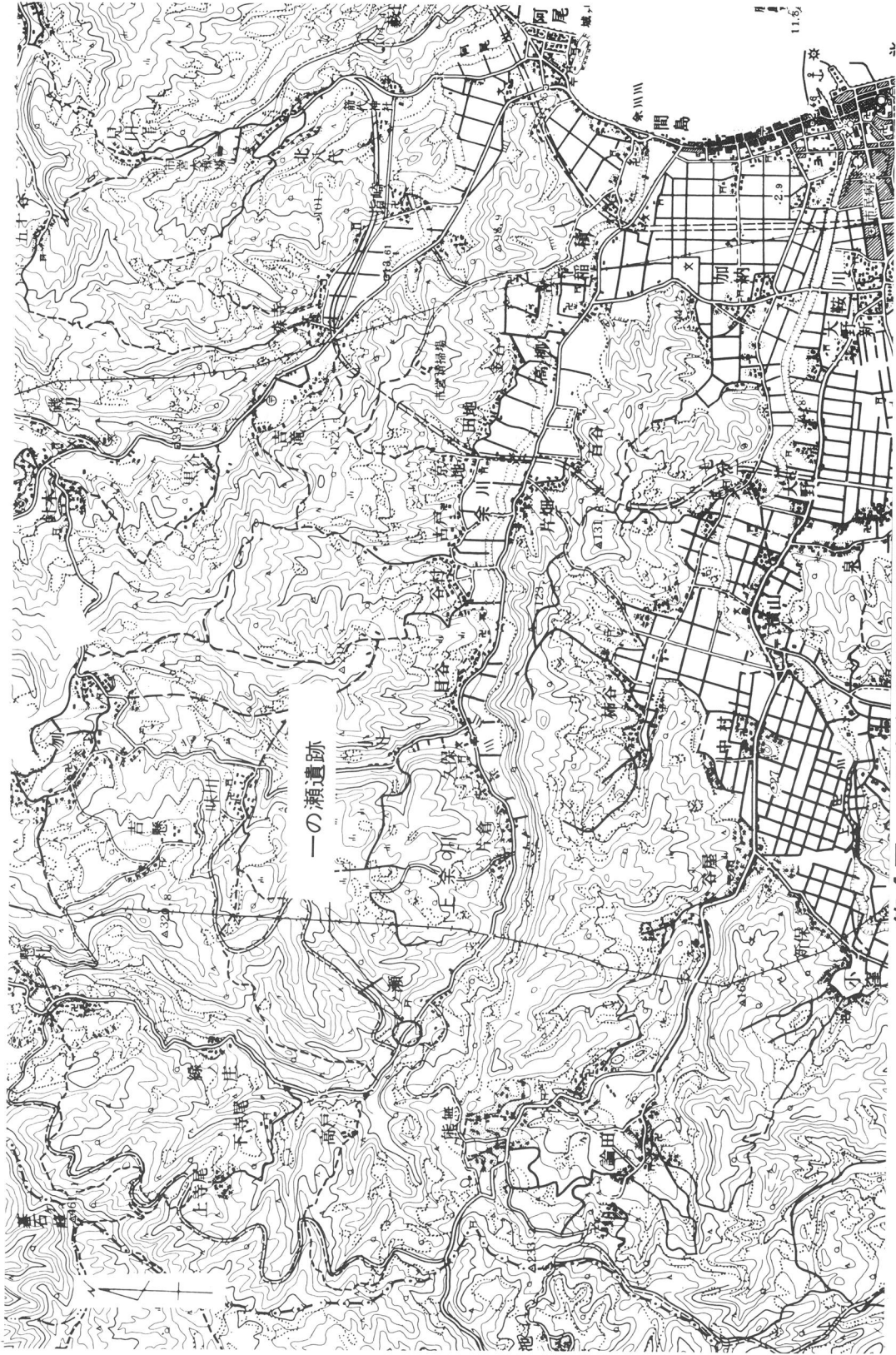
また、土器の出土状況が極めて不規則で混然として居り、かつ細片が多いことなどから、台地東側の道路を拡張しようとして、径30～60cmの石をならべ、ここに土砂をつめて道づくりをしたことがあり、この土砂中に土器が包含されていたと考えることが出来る。

しかし、この道路づくりの記録もないし、これを知っている古老もいない。随分と昔のようである。

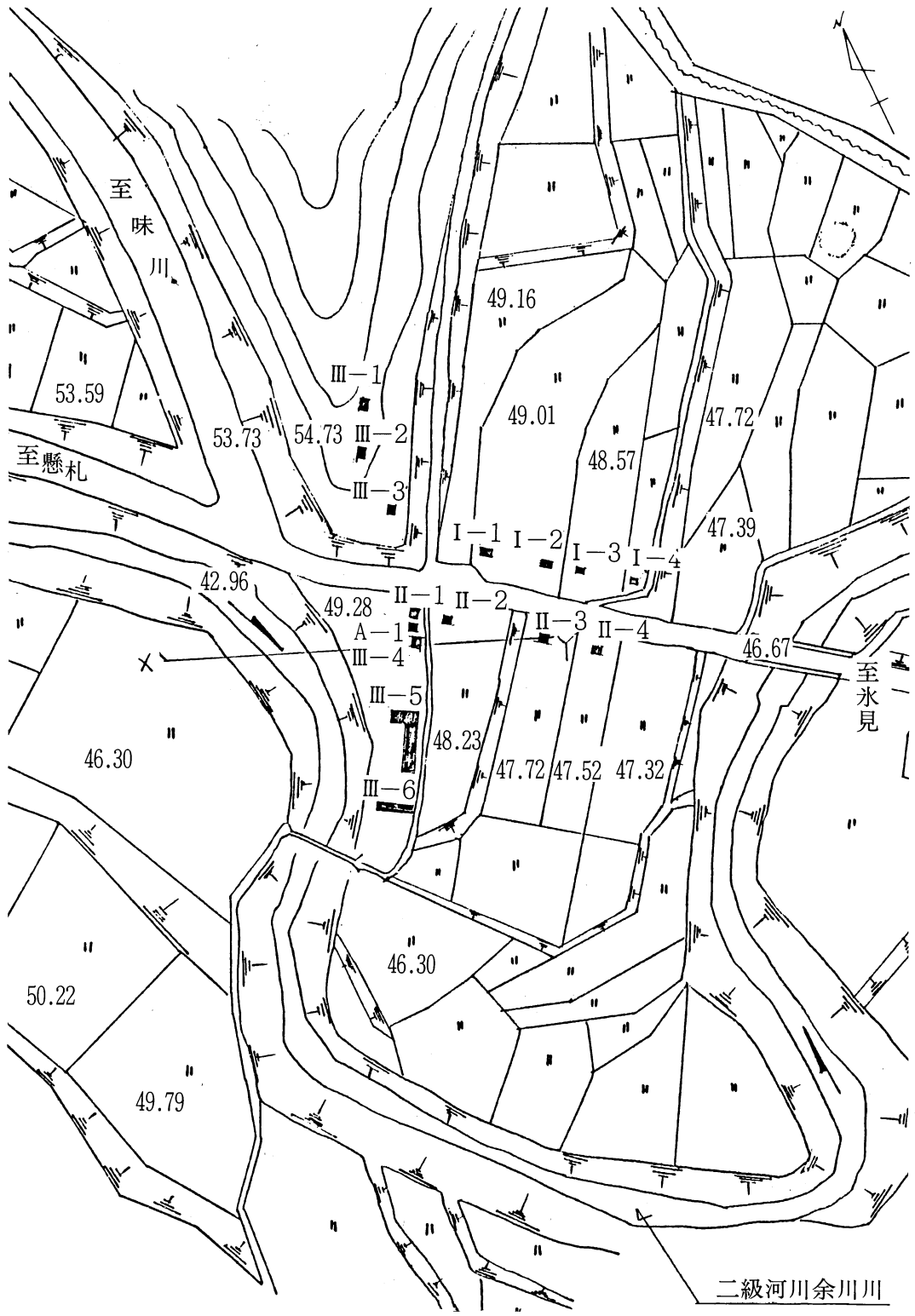
土器は、縄文中期末頃から後期中頃に及ぶもので、近くの一勿前田遺跡出土土器に似ている。ほぼ同一時代と考えられる。石斧3点も製作手法など一勿前田出土のものに似ている。なお、この包含土がどこから運ばれて来たかは調査してみたが未だ判明しない。

出土したものは石斧3点、縄文土器片約100点である。（第7図A層位、B石器、第3図下段土器参照）





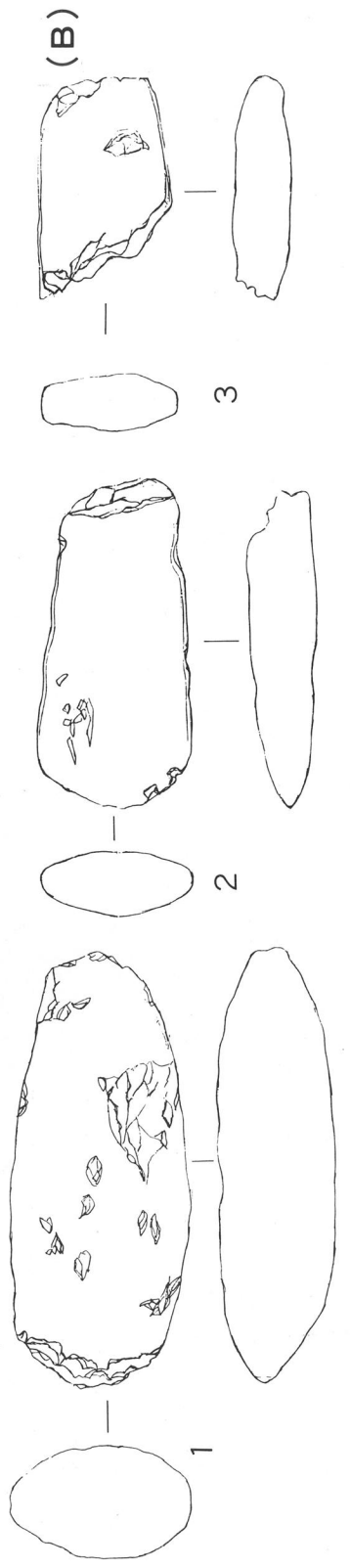
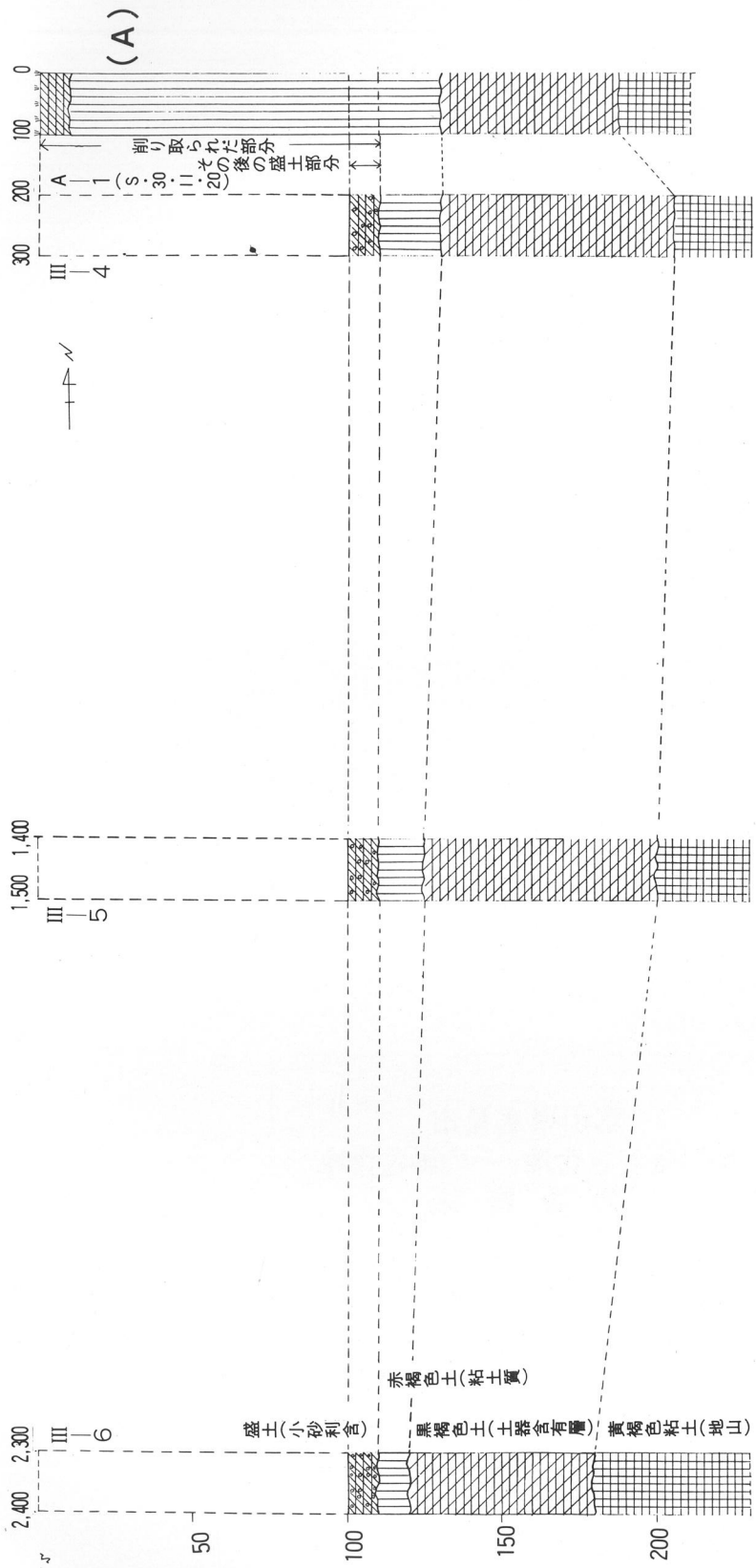
第4図 一の瀬包舎地近辺図 (50,000分の1)



第5図 一の瀬発掘トレンチ図 (水田などの数字は標高  
トレンチはI・II・IIIで示す)  
(1,000分の1)



第6図 明治初年の地引図にみる昔の道路 C—A—B—D  
 (1,000分の一)



第7図一の瀬包含地層位図(A)・石斧実測図(B)

富山県氷見市  
鞍川金谷包含地、一の瀬包含地  
調査概報

発行日 昭和 55 年 12 月 1 日

発行者 氷見市教育委員会

富山県氷見市丸の内 1-1

印刷者 アヤト印刷(株)

富山県小矢部市八和町 4-32